

第30回

## 帝国主義と民族主義の音楽 ～西洋音楽の歴史と鑑賞（6）～



講師  
沼野雄司

学習のねらい

19世紀も半ばを過ぎると、「同じ言語や文化や民族」を単位にして国が成立するべきだという、国民国家の概念が現れ、広大な帝国からの独立を試みる運動や、逆に狭い地域が連結して新しい国家を建設しようという動きが次々に出てきました。音楽も大きな変化を迎え、ドイツやオーストリアを中心に展開してきたロマン派の音楽は、不可避の内に、さまざまな民族性を取り入れることになったのです。今回はこうした「民族主義」音楽について理解を深めていきましょう。

### 19世紀末から20世紀初頭における音楽状況について考える

西洋音楽史における19世紀は、ドイツ・ロマン派の時代ということができます。

もちろんフランスやイタリアでも、とりわけオペラの創作は盛んに行われていますが、器楽、あるいは大規模な管弦楽曲ということになると、ベートーヴェン以降のドイツ人作曲家たちが、ヨーロッパ全土で活躍していました。ところが19世紀も後半に入ると、チェコ出身のドヴォルジャーク、ノルウェー出身のグリーグ、ロシア出身のムソルグスキーといった人々が注目を浴びようになります。彼らはいずれも、最初はドイツ・オーストリアの古典派やロマン派の音楽を学びながらも、徐々に、祖国の音楽の香りをそこに織り込んでいった作曲家たちです。こうした動きを音楽史では「民族主義」の名で呼んでいます。

### 帝国主義と民族主義の関係について理解を深める

民族主義と呼ばれる音楽の少なからぬものは、当時の帝国主義に対する反発でもありました。「帝国」というのは、民族や宗教、言語など、そもそも文化が大きく異なる地域を、政治的な力でひとつにまとめた国家形態を指します。しかし先に述べたように、19世紀後半になると、帝国内の諸地域は強く独立を願うようになります。

例えば現在のチェコやハンガリーは、当時はオーストリア帝国の一部でしたから、独立を求めて民族意識は高まる一方でした。結局、これらの国の多くは20世紀初頭、とりわけ第一次世界大戦を境にしてようやく独立を果たします。ゆえに民族主義の運動がもっとも盛んになったのは、こうして各国が独立を果たす前、19世紀のおわりから20世紀初頭にかけてということになるわけです。

## さまざまな国のアイデンティティを体現する作品を体験する

では、実際の民族主義の音楽には、どのようなものがあるのでしょうか。まずはロシアの場合を考えてみましょう。

ロシアは先に述べたチェコやハンガリーとは異なり、むしろ 19 世紀には大帝国として君臨していた存在です。しかし音楽という面では西洋に大きく遅れをとっており、ロシアの民族的、あるいは土俗的な伝統を生かした音楽を早く確立すべきだという気運が高まっていました。

ムソルグスキーの「はげ山の一夜」の強烈な色彩感には、こうした思いがよく表れています。一方、チェコ出身の作曲家ドヴォルジャークは、若いころにはドイツ的な音楽を書いていましたが、やがて故郷のボヘミア地方の民謡をはじめとするさまざまな要素を取り入れた作品を発表して一躍名をあげました。

また、フィンランドのシベリウスは、ロシアの圧政に苦しむ祖国の独立の思いを、フィンランドの叙事詩をさまざまな音楽に託した作曲家です。彼が 1900 年に書いた交響詩「フィンランディア」は、その民族主義的な運動の中で、第二の国歌とよばれるほどの人気曲となったのです。

### ♪ 今回取り上げる曲 ♪♪♪

- ドビュッシー (フランス) …………… 「牧神の午後への前奏曲」
- スメタナ (チェコ) …………… 交響詩「わが祖国」「モルダウ」
- バルトーク (ハンガリー) …………… 「ルーマニア民俗舞曲」
- シベリウス (フィンランド) …………… 交響詩「フィンランディア」
- チャイコフスキー (ロシア) …………… 交響曲第 6 番 短調「悲愴」
- ムソルグスキー (ロシア) …………… 交響詩「はげ山の一夜」
- ドヴォルジャーク (チェコ) …………… 交響曲第 9 番 短調「新世界より」